

夢湧き夢に夢中

第 16 号

令和 7 年 1 月 17 日 文責：大谷

「苦しいときは前進している」

今からちょうど四十一年前、当時小学六年生だったわたしは、テレビの前で、ひとりの高校生の「ワンプレー」に心を奪われた。

その当時、高校サッカー界は「三羽ガラス」と呼ばれた長谷川、大槻、堀池ら超高校級のスター選手と一年生エース武田を擁する清水東高校が、実力、人気ともに他を圧倒していた。そして、わたしも清水東の真つ青なユニフォームに憧れ、帝京高校との決勝戦に釘付けだった。誰もが清水東の日本一を信じてやまなかった。しかし、清水東の一瞬の隙を突いて放たれた帝京のクロスボールが清水東のゴール前へ。これが絶対的王者だった清水東を倒し帝京を日本一に導いた「ワンプレー」であり、虹のような美しい放物線が、ひとりの少年の心を射貫いた。この選手こそ、平岡和徳先生（現宇城市教育長、大津高校サッカー部テクニカル・アドバイザー）である。

平岡先生との出会いは、今から約二十八年前。地元中学校に勤務していたこともあり、多くの教え子たちが大津高校サッカー部に入部することになったのを機に、ご縁をいただき、以来サッカーのことはもちろん教師として、そして人としての生き方を数多く指南していただいた。そんな平岡先生との年月の中で、幾度となく掛けていただいた言葉がある。

「苦しいときは前進している」

これまでわたしは悩んだり苦しんだりする度に平岡先生のもとを訪れた。そして、「苦しいときほど人は前進しており、前進した先には必ず夢があるのだ」と説いていただいていた。さらに「風は向かい風が強いときほど高く舞い上がるだろう。人も向かい風が強い（＝苦しい）ときほど、成長するものだ」と。

大津高校は、これまで何度も優勝候補のひとつに挙げられてきた。ときには多くの有望選手を擁した最有力候補とも評された年もあった。だが、日本一という壁は高く険しいもので、その度に跳ね返されてきた。「大津は大勝負に弱い」や「シルバークレクター（準優勝ばかり）」とまで揶揄されることも。しかし、大津高校は決してそれに屈することなく、「苦しい今こそ、前進している」を頑なに信じ続け、今日に至った。先般、高円宮杯 U-18 サッカープレミアリーグ・ファイナルに勝利し、念願だった「全国制覇」を達成したことは、まさに「前進してきたその先の夢」に他ならない。今大会は残念ながら三回戦で敗れてしまったが、日本屈指の強豪校を相手に一歩も引けを取らないその闘いぶりは、観るものを熱くした。心から敬意を表したい。

「九州の、熊本の、この片田舎にある小さな公立高校が、いつか必ず日本中を驚かす日がくる」

出会った頃、こう語られていた平岡先生の夢が、三十数年の時を経て本当に現実になった。「夢を叶える」とは、長い年月を要するとても愚直な努力の継続なのかもしれないが、その先にこんなロマンがあるならば、わたしも、今からでも愚直でありたい。

敗戦後、進化するブルー軍団（＝大津高校サッカー部の愛称）は、さっそうと大津町のグラウンドでボールを追いかけていた。そして、選手たちが身にも増して輝いているようにも見えた。「苦しいときに前進、いや進化している」との表れか」とさえ思えた。と同時に、

四十年前に少年が憧れた「真つ青」よりも、そのブルーは一段と美しかった。前進している者の放つ光は輝いているのだ。



■3学期の始まりとともに、一段と厳しい寒さを迎えておりますが、保護者の皆様におかれましては御健勝にてお過ごしのことと拝察します。3学期は、3年生の入試をはじめ卒業式そして1、2年生の進級に向けて学校総体となって一致団結していく時期です。どうか保護者の皆様の御理解と御協力をお願いいたします。